

ISSN 0910-2396

# 野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第185号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成28年9月21日

ハチクマ



2016. 8. 11 石狩市厚田区

撮影者 北山政人 (札幌市)



も く じ

|                          |             |       |    |
|--------------------------|-------------|-------|----|
| バードウォッチャーズ スケッチブック (その2) |             |       |    |
| 札幌市中央区                   | 本間 康裕       | ..... | 2  |
| 落ちている羽根は宝物? 野生生物総合研究所    | 中田 達哉       | ..... | 4  |
| 鳥の「あし」一跼蹠(ふしよ)のことなどー     |             |       |    |
| 札幌市北区                    | 樋口 孝城       | ..... | 6  |
| コヨシキリの不思議                | 美唄市 藤巻 裕蔵   | ..... | 7  |
| 探鳥地紹介 舞鶴遊水地              | 千歳市 島崎 康広   | ..... | 8  |
| 濤沸湖タンチョウの配偶行動と縄張り争い      |             |       |    |
| 網走市                      | 白波瀬幸男       | ..... | 9  |
| シマアオジに関する想いや感想を募集!       | 編集部         | ..... | 10 |
| 表紙の鳥(ハチクマ)               | 札幌市西区 北山 政人 | ..... | 10 |
| 野鳥情報コーナー                 |             |       |    |
| 天売島にオオチドリ、ヤマヒバリ、オウチュウが飛来 |             |       |    |
| 苫前郡羽幌町天売島                | 齊藤 暢        | ..... | 11 |
| 野付半島におけるハシブトアジサシの観察記録    |             |       |    |
| 道東コクガンネットワーク             | 藤井 薫        | ..... | 12 |
| シロハラクイナが伊達市アルトリ岬に現れました   |             |       |    |
| 伊達市                      | 福田 友子       | ..... | 12 |
| 北の地に飛来したサンコウチョウ          |             |       |    |
| 日本野鳥の会苫小牧支部              | 新谷 幸嗣       | ..... | 13 |
| 探鳥会ほうこく                  |             | ..... | 13 |
| 探鳥会あんない・鳥民だより            |             | ..... | 16 |

バードウォッチャーズ スケッチブック (その2)

札幌市中央区 本間 康裕

ジョウビタキ *Phoenicurus aureus*

*Phoenicurus aureus*  
6. Apr. 2015  
Sapporo, NHUJAZSA



非常の鶉

札幌市の円山はいつ歩いてもいいところです。山頂を目指すのもいいですが、円山と隣接する円山動物園の間の小川のわきの道をたどるのも楽しい。エゾリスやシマリスに餌をやるのを正しいことだと考えている人たちや、それを知って無遠慮によってくるリスや野鳥たちに悩ましい思いをしながらも、時々、思いがけない野鳥と出あうことがあります。

2015年4月8日の午後、旭山記念公園を回ってから、堺川、双子山と歩き、円山西町の住宅地を抜けて、動物園わきの小川の道に出ようとしていました。住宅の間から円山の樹林が見えたとき、黄色っぽい鳥が幹に止っているのが目に入りました。キビタキですか? いいえ、黄色というよりはオレンジ色のおなか、白い頭に黒い背。ジョウビタキでした。ずいぶん派手に見えました。まるで熱帯雨林(行ったことはないですけど)が似合うような姿です。シジユウ

カラが寄ってくると、それを嫌がるように飛び上がりますが、いなくなるとまた戻ってきます。なんかそんなことを繰り返すうちに飛んで行ってしまいました。あわてて写真を撮りました。その時の画像をもとに描いたのがこの絵葉書です。

北海道でジョウビタキを見るのは珍しいことです。帰宅後、さっそく北海道野鳥愛護会の副会長(※)、樋口孝城さんにメールしました。するとすぐに丁寧な説明が戻ってきました。「石狩管内に限らず、北海道全体でジョウビタキは『数少ない旅鳥』だったが、石狩管内では、ここ10年はほぼ毎年見られる」とのことです。

そして「ただ、希に見られない年もあるので、この目撃記録も、もしかしたら今年唯一になる可能性も」と人を(「希少記録を手にした」と)喜ばせるようなことも追記されていました。しかし、この年は石狩管内各地で見られたようで、2015年6月発行の北海道野鳥愛護会報「北海道野鳥だより」の表紙には中村隆さんが3月30日に石狩市で撮影された美しいジョウビタキの写真が掲載されました。同会ホームページでカラー写真が見られますのでどうぞ、ご覧ください。

さて、そのジョウビタキですが、漢字では「常鶉」「尉鶉」「上鶉」などと書かれます。「常」はいつも(常に)見られるヒタキだから。「尉」はお能の尉(じょう)の面で見られるように白髪のお年寄りの意味、ジョウビタキの白い頭を表しています。「上」は上等なヒタキという意味〜だそうです。

そこで、どれが正しい表記か突き止めてやろうと（愚かな）野心がわきました。新かなづかいではどれも「じょう」ですが、旧かなづかいでは「常」はチャウ、「尉」はジョウ、「上」はジャウと書きます。江戸時代はどう書かれていたのか、「図説日本鳥名由来辞典」で調べことにしました。残念！同辞典には40以上の「鳥類図譜」（江戸時代の鳥類図鑑みたいなもんですね）に載った鳥の名前が表になっていますが、あるある。チャウ、ジョウ、ジャウと三つそろってました。素人がなにか見つけようって、そうは問屋が卸さないということですね。

私にとっては漢字表記が定まらない（常にならない）という意味で「非常鵜」になりました。

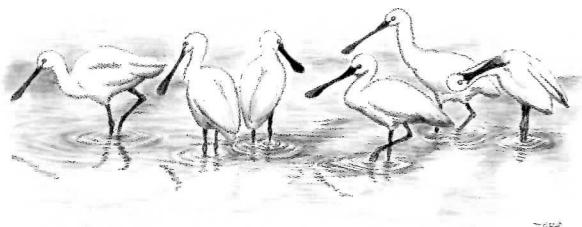
と、思っていたら「非常」はそこにとどまらず、ジョウビタキを観察した翌日、胆石発作を起こし、急きよ、入院。胆のう摘出手術を受けるという「非常事態」になりました。

実は、樋口さんからのジョウビタキの記録についてのメールの末尾には、ちょうど旅行から帰礼したばかりで「旅先で急性胃腸炎を起こし、回復思わしくなく、昨日、今日と点滴して落ち着きました」とありました。そんな痛苦のさなかに折あしくメールを送っていたのです。

どうやら「非情鵜」でもあるようです。

### ヘラサギ *Platalea leucorodia*

*Platalea leucorodia*  
11 Jul 2015  
Nagahama  
Mitsuru Otsu



### 地図にない沼

「ヘラサギがいたそうですよ」。北海道野鳥愛護会の副会長(※)、樋口孝城さんがボソッとつぶやいたのは2015年7月の同会定例幹事会後の懇親会の席上でした。ヘラサギは北海道で簡単に見られる鳥ではありません。しかも複数いたという話でした。かなり酔っていたのですが、これは大変と思い「どこにいましたか」と聞くと「長沼町の舞鶴遊水地だそうす」という答えでした。

翌日は用事で忙しく、翌々日、何とかヘラサギを見たいという思いで目を覚ました。道路地図を広げて長沼町を見ましたが、「舞鶴遊水地」は載っていません。ただ舞鶴という地名はあります。その近くの千歳市との境界、長都沼は有名な探鳥地で、行ったことがあります。ともあれ探そうと車で家を出ました。

カーナビに遊水地が記載されているかもしれないと思って車上で、拡大縮小しましたが、ありません。長沼町でパークゴルフ場の人に聞きましたが知りません。この辺だ

ろうと地図にある無名の池をたどりましたが違いました。樋口さんに詳しい場所を聞けばよかったと後悔し、長沼の道の駅で昼食をしたため、すごすご引き返しました。

その次の日、諦めきれず、今度は自宅でインターネットの情報を集めました。ネットによると舞鶴遊水地は千歳川が氾濫しそうになったときに水を流す池で、例の千歳川放水路が市民の反対で造られなくなった代わりに洪水対策として何ヶ所かに設けられたものの一つだそうです。舞鶴遊水地は2015年春に完成、地元の小学生らを招いて植樹を行ったというような地元紙の記事もありました。さらに、ある土木会社のホームページに自社が工事を請け負ったことなどが紹介されていました。場所の表記はありませんが、写真が載っていました。そこには洪水が収まったときに、遊水地から千歳川の支流、剣淵川に河川水を戻す樋門が写っていました。ちょっと中世のお城の塔のような外観です。「これだ！」と思って、今度はネット上の地図から舞鶴地区を探し出し、ここぞと思う場所のストリートビューで周囲の風景を見て樋門を探しました。

「ユーレカ！（われ見出せり）」と思わず叫びました。道道にかかる繁殖橋という橋から撮られた画像に塔のような樋門が見えます。この時すでに午後5時過ぎ。いかに日の長い北海道の7月といえども日は傾いています。でも、明日までは我慢できません。愛車のハンドルを握り、はやる心に法定速度で、繁殖橋（なんとも鳥の生息地にぴったりの名前ですね）を目指しました。

そして、午後6時30分、ついに橋を発見、樋門を見つけ、土手のような広場になった場所に車を止めると目の前に草に囲まれた遊水地がありました。辺りはまだ明るく、水面を見ると白い鳥影が…。「ダイサギじゃないよな」と祈る気持ちでスコープをのぞくとヘラサギでした。なんと6羽（半ダース！）もいます。歩きながら思い思いのポーズをとっていました。しばらく写真を撮っていると6羽は飛び立ち、草むらの陰に入ってしまった。この時、午後6時50分。周囲は暗くなっていました（帰宅後、撮影した写真を拡大して、顔の部分をじっくり見ましたが、クロツラヘラサギはおらず、すべてヘラサギでした）。

その後の定例幹事会後の懇親会で、この話をすると幹事の清水朋子さんが「ぜひ行ってみたい」というので、場所を説明しましたが（私の説明も悪いのですが）、結局行きつけず、あらためて地図を描いて差し上げ、やっとたどりつけたそうです。

ヘラサギは、その後しばらく、ここにいたようです。このようにわかりにくい場所のため、うるさいバードウォッチャー（自分のことは棚に上げて）やカメラマンに煩わされなかったからかもしれません。

不確かな話で恐縮ですが、舞鶴とは昔、タンチョウの記録があるゆえの地名とか。また、この遊水地にタンチョウを戻そうとの動きもあるとか。水鳥たちの楽園ができることを祈ってこの絵を描きました。（つづく）

※ 編集部注 執筆当時の役職で、本年度からは会長

## 落ちていた羽根は宝物？

野生生物総合研究所 中田達哉

### ・はじめに

野外に出ていると、落ちていた羽根を見る機会は何度もあるかと思います。

そんな羽根を見たとき皆さんはどうしますか？

拾う、写真を撮る、無視するなど人によって様々かと思えます。

私の場合、何気なく落ちていた羽根は価値のあるいわゆる宝物のように見え、ついつい拾ってしまいます。今回はそんな私の落ちていた羽根に対しての考えを書かせていただきたいと思っています。

### ・落ちていた羽根は宝物？

現在日本では、法律上で狩猟鳥や有害鳥に指定されている種以外は基本的に採集してはいけない事になっています。前述した2つに指定されている種に関しても狩猟期間や捕獲のための申請が必要となります。

生物を保全するために採集を行わないということは、確かに優れているように見えます。現に狩猟圧で絶滅した鳥類は世界中に何種類もいますし、同じ過ちを繰り返さないという点でもむやみやたらと生物を捕獲する事は賛否があると思います。しかし、捕獲できないということは、標本の収集という部分に関して大きな打撃を与えています。

生物の標本はその時代その場所にその生き物がいたことを証明することのできる唯一の物的証拠です。昆虫や植物の場合には、標本を作らなければ種を同定できないものも存在するため、標本の収集は欠かせないものとなっています。鳥や哺乳類の場合、ほとんどの昆虫や植物と違い個体数が少ないため、採集圧がかかりやすいことや、写真から種を同定できるものが多いことなどから、採集や標本の重要性が忘れられがちですが、鳥類や哺乳類の分野でも標本は絶対的な証拠として今でもとても価値の高いものです。

では、現代社会でどうすれば鳥の標本を残すことができるのか？と言う話ですが、ここで羽根の出番となります。標本とは、種を特定する根拠があり、採集日、採集場所、採集者が分かれば成り立つものです。羽根は、上手く調べると種を特定できるため、採集日、採集場所、採集者を記入したラベルさえあれば標本としての価値があるものとなります。

実際に羽根が標本として認められ新種が記載された例があります。台湾に生息するミカドキジは、原住民の付けていた羽根飾りが種の同定のきっかけとなり、その羽根飾りに使用されていた2枚の尾羽が種を決定づけるために必要

な基標本となり新種として記載されました。

ミカドキジの例は実際に羽根標本が新種の記載に使用された数少ない例の一つですが、近年羽根の標本を基にしたDNAの解析でいくつもの新種が記載されています。鳥類だけでなく、様々な生き物の分類の分野でDNAによる分類が注目を浴びるようになってきています。日本でも鳥類目録第7版からDNAを基にした分類を取り入れており、中でもDNAの解析により、これまで亜種とされていたメボソムシクイ、オオムシクイ、コムシクイがそれぞれ種として独立したというのは大きな話題となりました。DNAによる分類は形態による分類と違い、解析のために生き物の細胞サンプルが必要になります。鳥類の場合は、羽根や血液を標本として使う場合が多く、羽根は血液と違い生きた鳥や死んだ鳥だけでなく、野外に落ちていたものからもDNAを採集できるという点で優秀なサンプルとなっています。サンプルと言う横文字を使うことが多いため、ピンと来ない方も多いかと思いますが、サンプル (Sample) とは標本を英語に訳したもので、羽根のサンプルは、羽根標本の事になります。

このように羽根の標本は現在でも大変価値のあるものとなっています。

### ・羽根標本の課題

羽根を標本として扱うためには、種が特定できる根拠すなわち、その羽根がどの鳥のものかを特定しなくてはなりません。しかし、鳥の羽根から種を確実に同定できる人が少ないことや、種を同定するための資料が少ないことが羽根標本を作る上で大きな課題となっています。

現在日本では数種類の羽根の図鑑が出ていますが、ほとんどが絵の図鑑で使い慣れないと種を特定することが難しいというのが現状です。実際昔私が拾ったトラツグミの羽根は鳥に詳しい友人から図鑑を片手に「これはムクドリ羽根だよ」と言われ、疑うこともなく数年間間違いに気づくまでラベルをムクドリとしていました (写真1)。その後たまたまトラツグミの羽根を近くで目にする機会があり間違いに気づくことができましたが、種が特定できる状態で羽根を目にする機会や、これは他の生き物の標本にも言えることですが、同定がある程度できる方が指摘しない限り誤同定に気付くことは難しいかと思われます。今後羽根に関する詳しい図鑑や、ある程度羽根を同定できる専門家が增える事を期待し続ける限りです。



・まずは拾ってみてください

ここまで長々と書きましたが、まずは1枚でも羽根を拾ってみてください。

羽根は綺麗な物も多く種によって触り心地が全然違いますし、何よりも羽根の持ち主が分かったときに驚くこともたくさんあります。

今までに私が驚かされた例をいくつか挙げてみます。まずカッコウヤツドリは、灰色で地味な鳥と言うイメージがありましたが、羽根を1枚1枚見ると案外グラデーション豊かで綺麗なことがわかりかかります(写真2)。またカワセミの尾羽や腰の羽根は全体が綺麗な瑠璃色ですが、翼から生えている初列風切羽のほとんどは瑠璃色の部分が少なく案外地味なものです(写真3)。

これ以外にも、羽根を1枚1枚見ると、野外で見ている鳥からは想像できないことがたくさんありますし、また羽根を拾ったあとにその鳥を観察すると、それまでとはまた違った見え方がします。この辺りが羽根収集の醍醐味だと私は思っています。

1枚拾ってみて興味を持ってそうだと思った方は、是非羽根の標本を作ってみてください。

羽根の標本は昆虫や植物の標本のように手間がかかることはほとんどなく、洗って乾かしてラベルと一緒にジッパー付き袋などに入れてしまって置くだけで標本として扱うことができるので、誰でも簡単に標本を作る事ができます(写真4)。是非試してみてください。

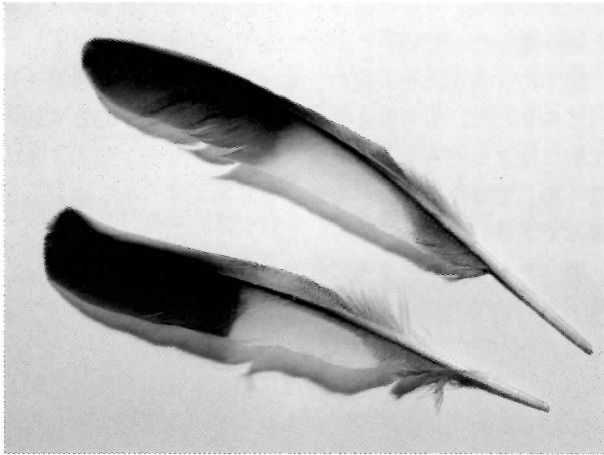


写真1 大学時代に拾ったトラツグミの羽根  
(当初ムクドリと思っていた)

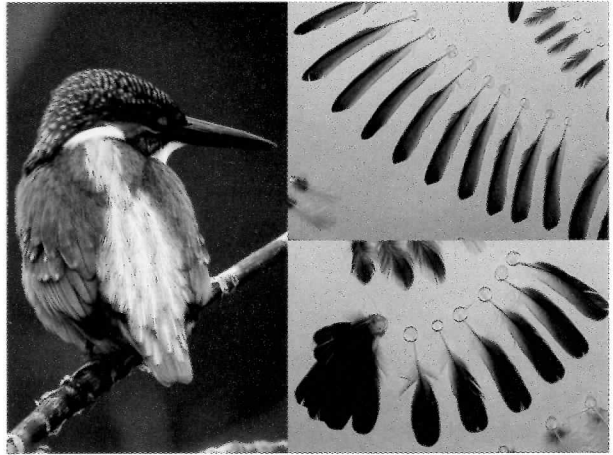


写真3 カワセミ(左)とその初列風切羽(右上)、  
尾羽(右下)

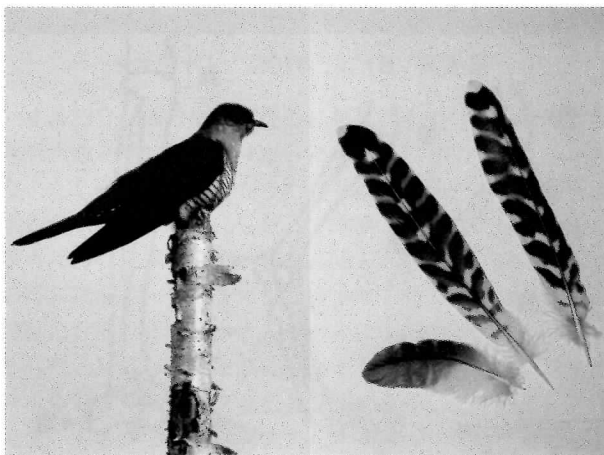


写真2 ツツドリ(左)とその羽根(右)



写真4 標本としてジッパー付き袋に入れた  
コミミズクの羽根

# 鳥の「あし」— 跗蹠(ふしよ)のことなど —

札幌市北区 樋口孝城

今の時代、足が長いほど格好良く見えるというのは多くの方が認めるのではないのでしょうか。鳥の世界はどうでしょう。足の長い鳥の代表的なものはツルの仲間とか、サギの仲間のアオサギとかダイサギです。シギの仲間のセイタカシギの足も長いですね(写真1)。みんな、なかなか見栄えがします。



写真1 セイタカシギ

反対に足の短い鳥もたくさんいます。極めて個人的な好みですが、たとえばミツユビカモメです。外洋性の鳥ですから、普通はあまり見られないのですが、私がよく行く石狩浜にたまたまいたのを初めて見た時には、その足の短さがとても印象的でした。決して格好悪いわけではなく、どちらかという可愛さがあります。他からちょっと写真を拝借して、ユリカモメと並べてみました(写真2)。両種はほぼ同じ大きさなのですが、足の長さがだいぶ違います。一見したところでは、ミツユビカモメの足の長さはユリカモメのその半分くらいでしょうか。

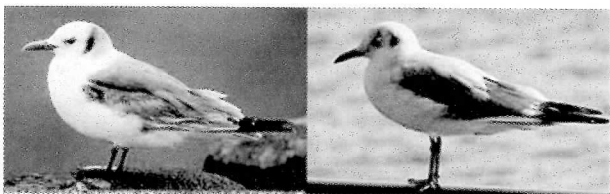


写真2 ミツユビカモメ(左)とユリカモメ(右)

鳥の種類にもよりますが、一般的な野鳥図鑑などでは識別点として、足の色とか長さとかがあげられています。さて「足」とはどこでしょうか。「足は足に決まっているでしょ」と言わずに、以下、ちょっとだけお付き合い下

さい。

「あし」の漢字には「足」と「脚」があります。鳥関係の、ちょっと古くて、学術的な本では「脚」が散見されますが、近年の一般的な図鑑などでは「足」が殆どです。たいていの図鑑では初めのところに鳥の絵があり、各部の名称が書かれているのですが、面白いことに、その中に「足」があるのはごく一部です。その代わりに「跗蹠」なんていう難しそうなものがあります。ひらがなで「ふしよ」ですが、「跗」はあしの甲、「蹠」はあしの裏の意味だそうです。「どうしてここがあしの甲と裏なの?人間と随分違うじゃない?」となります。

図1に、鳥と犬と人間の、膝(ひざ)から下の骨格を並べてみました。もちろん犬の場合は後ろ足で、鳥と人間の比較に役立つだろうと考えて入れてみました。なお、鳥では「指」ではなく「趾」です。とりあえず「あしゆび」と読んで下さい。

踵(かかと)のところに注目して下さい。普通に立った時、人間は踵が地面に付きますが、犬は人間でいうつま先立ちの状態、踵はだいぶ上にあります。鳥はそれをもっと顕著です。犬や人間の足にはつま先(指先)と踵の間に5本の中足骨というのがあります。人間ではそれが足の甲を形成しています。進化の過程は面倒だからちょっと横に置いておいて、ともかくも人間では5本ある中足骨が、鳥では1本だけになっており、さらに脛(すね)側の骨と融合して跗蹠と呼ばれる部分になっています。おおまかではありますが、図1では対応する部分を点線でつないであります。これで前述した「跗」があしの甲、「蹠」があし

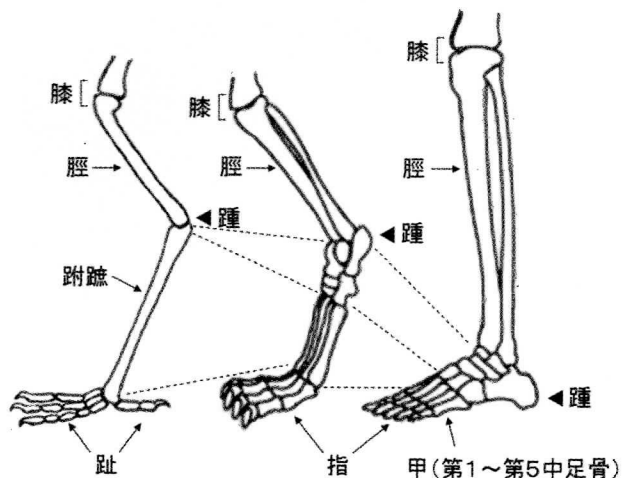


図1 鳥(左)、犬(中)、人間(右)の足の骨格

の裏」ということが何となく納得できます。

翼を得た鳥にとって、歩くための「あし」はそれほど重要視されなかったのでしょうか。また、軽さを求められたのでしょうか、骨の数は少なく、形も随分とシンプルです。踵といっても人間の踵骨（しょうこつ）といった特別のものがあるわけではなく、単に踵に相当する部分というだけです。

踵の上は脛です。写真のミツユビカモメではほとんど隠れています。ユリカモメではちょっと見えます。セイタカシギでは脛も随分と長くなっています。足が長い鳥は脛も

附離も長いのが普通です。人間では脛の上端には膝があり、その上に太もも（大腿）があって骨盤に至ります。鳥でも同じようになっていますが、それについてはまた別の機会に。

さあ、つま先立ちをして踵を上げ、ちょっと腰を下げ気味にして下さい。足だけは少し鳥になった気分になれます。ついでに足の甲をこれまた思い切り伸ばして下さい。セイタカシギになった気分になれます。うーん、ちょっと無理ですか…。

## コヨシキリの不思議

美幌市 藤巻裕蔵

私は北海道における鳥類の分布を明らかにするため、1978年以来繁殖期に道内各地で調査をしている。帯広にいたときには、おもに上川、十勝、日高、釧路地方で、定年後美幌に住むようになってからはおもに胆振、石狩、空知地方と上川地方（帯広時代の未調査地域）で調査してきた。

最近、旭川とその周辺で調査していて一つ気の付いたことがある。それは繁殖期でもコヨシキリが観察されないということである。これまで調査した旭川市の石狩川、オサラッペ川、永山新川の河川敷は草地で、コヨシキリが生息していてよさそうな環境であるが、コヨシキリは観察されなかった。一方、同属のオオヨシキリは普通に生息しており、永山新川ではかなりの高密度であった。

このことを各地で鳥類の調査をしている川崎康弘さんに話したところ、自分の観察記録を調べてみたがやはりコヨシキリの記録はなかったとのことであった。また、富良野の空知川の河川敷やヌッカクシ富良野川沿いでもコヨシキリは観察されなかった。しかし、旭川にお住まいの柳田和美さんの話では、コヨシキリが旭川地方にまったくいないわけではないようである。それに富良野から旭川にかけてはまだ調査していない所もあるので、この地域にコヨシキリが生息していないとは断言できない。一つ言えるのは、生息していたとしても、非常に低い密度だということである。

では、なぜこのような現象が見られるのであろうか。私は、次のように考えている。コヨシキリは河川敷の草地のような開けた環境のある川沿いを通して内陸部に入るが、その渡りルートに森林帯があると、それを越えられないのではないかと考えている。空知川では滝里と

その周辺、石狩川では神居古潭とその周辺は森林帯である。上川盆地の北では、天塩川沿いにはコヨシキリが分布している。天塩川は士別で東に向かい、その支流の剣淵川が南下しているが、多分塩狩峠あたりが越えられない壁になっているのではないかとおもう。東側では、常呂川の下流部沿いには生息しているが、大雪山系を越えられないと思われる。

コヨシキリは小さいとはいえ、越冬地から広い海を渡ってくる飛翔力をもっている。それなのになぜ島の内陸部まで入ってこれられないのであろうか、不思議である。

今後とも繁殖期の調査を続け、コヨシキリが分布している地域と分布していない地域の境界がどこなのかを確かめたいと考えている。



# 探鳥地紹介 舞鶴遊水地

千歳市 島崎康広

かつて多くのマナヅルやタンチョウが舞い、繁殖していた地に今、多くの水鳥たちが戻ってきています。千歳川放水路計画中止決定後、千歳川流域の治水対策として6市町（江別市、南幌町、北広島市、恵庭市、長沼町、千歳市）に各一箇所づつ、遊水地を作ることが決まり、工事が始まっています。その一つ、長沼町の剣淵川沿いに約150haの舞鶴遊水地が一足先に去年、完成しました（図1）。

遊水地のすぐ近くにある舞鶴小学校の校章はマナヅル（一時期はタンチョウだった）がイメージされていますし、開拓当初、この地域は「フシコベツ」と呼ばれていましたが、鶴が多く見られたので「舞鶴」と地名が付けられました。遊水地の工事が進むなか、舞鶴地区の有志の農家が集まり、タンチョウが生息できるよう環境や地域づくりを進めることを目的に「舞鶴遊水地にタンチョウを呼び戻す会」を2014年5月に立ち上げました。

原稿を書いている時点では、舞鶴遊水地の利活用方法は正式にはまだ決まっていますが、工事中の2012年8月に2羽のタンチョウが飛来しましたし、今年3月には1羽のタンチョウが何度か姿を見せました。かつてのツルの楽園は、時代が変わっても地形的にも地理的にも楽園復活になり得る場所なのかもしれません。



図1 舞鶴遊水地位置図



写真2 ヘラサギ 2015. 7. 24



写真1 タンチョウ 2016. 8. 27

その証拠に、遊水地の工事が終盤になり、大きな池が出来、草原も広がると瞬間に様々な野鳥がやってきました。その中には、渡りの季節になると数万羽のマガンやヒシクイがねぐらや餌場として利用し始めましたし、北海道では比較的珍しい野鳥が次々に姿を見せるようになりました。去年、5月中旬から9月頃まで最大で6羽のヘラサギが姿を見せ、今年も4月から7月（執筆の時点）まで最大で4羽が遊水地内や周囲の水田に姿を見せました。

それ以外にも5月からはセイタカシギやアマサギとともに数日、ツクシガモが姿を見せました。また、シマアジの群れが5月まで見られました。

水辺だけではなく、草原が広がっていますので、草原性の野鳥が生息するなか、上空ではチュウビ、ノスリ、チゴハヤブサが上空を舞い、今年チゴハヤブサの幼鳥も姿を見せました。また、南側の自然体験ゾーンと北側の草地の間には林があり、ウグイスやアオジ等の野鳥も確認できます。

前述しましたとおり、千歳川流域には他に5カ所の遊水地が工事中で、完成すると合計で約1,150haの面積があります。水が入っている時点ではどこも多くの水鳥が確認されています。今、道東ではタンチョウが飽和状態で、環境省がタンチョウへの給餌を段階的に取りやめていくと決め、ますます新たな生息地として期待できるのではないのでしょうか。また、宮島沼やウトナイ湖へ集まるガン類の分散地としても期待できるのかもしれませんが。どの遊水地も利活用方法は各自治体の希望で決められるようですが、どこも正式には利活用方法が決まっています。良い方向に進む



ことを期待したいです。

以下、この2年間で個人的に確認できた野鳥ですが、記録を付けないで見ていたため、抜けているものもあります。

ヒシクイ、マガン、コハクチョウ、オオハクチョウ、ツクシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、シマアジ、コガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、キジバト、アマサギ、アオサギ、ダイサギ、ヘラサギ、タンチョウ、セイタカシギ、シロカモメ、トビ、オジロワシ、オオワシ、チュウヒ、ノスリ、カワセミ、チゴハヤブサ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ショウドウツバメ、イワツバメ、ウグイス、センダイムシクイ、コヨシキリ、ムクドリ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、アオジ、オオジュリン



写真3 ツクシガモ 2016. 5. 15 (写真提供 品川 睦生)

## 濤沸湖タンチョウの配偶行動と縄張り争い

網走市 白波瀬 幸男

2011 (平成23) 年5月6日朝、タンチョウが瀕死の状態で見つかり (写真1)、自然保護官が釧路に移送中に死亡してしまいました。解剖の結果、おそらく縄張りに入りこんだタンチョウとの争いで頭を嘴で刺され、出血により死亡したようだと推測されました。

この抗争は、縄張りに侵入したタンチョウが争いに敗れ死んだのだと思ったのですが、同じ場所で事件の前に目撃したつがいと事件の後に目撃したつがいに、つがいの一羽が変わっていることに気が付きました。侵入したタンチョウが戦いに勝ち雌を略奪したように推測されました。雌は、長年(?) 連れ添った雄にそれほど未練は無い様で、事件の翌日からは新しい伴侶と行動を一緒にしていたので気づくのが遅れてしまったようです。戦いに勝った(?) タンチョウは翼の上に黒斑が残っており、3歳か4歳かと思われます。結局この年は、繁殖しませんでした。

2例目は、2016 (平成28) 年3月13日でした。ただし、今回は傷つきながらも既婚の雄が侵入者を追い払ったようです (写真2)。この時、雌はある意味傍観者を決め込み、「どちらが勝つの?」と様子を窺っていたように見えました。雌は侵入者について行っているように見えたのですが、怪我した雄は、猛然と侵入者を威嚇し追いかちます。その時も、雌は特別な行動をしていません (写真3)。

どのようにしてタンチョウのつがいが形成されるか明らかではありません。通常、亜成鳥は夏期も群生活をしていることから、その群れ行動の中で将来のカップルが決まっていける可能性もあるようです。

雌が他の雄と配偶行動を取る例が「タンチョウの釧路」(釧路叢書編さん事務局P64) に、標識の付いたタンチョ



写真1 瀕死のタンチョウ



写真2 傷ついたタンチョウ (右足腿あたりから流血)

ウの事例では、1996年生まれの雌が、1999年、2001年と別な雄とカップルとなり、更に2002年に別な雄とカップルで給餌場に現れた例が「Tancho」(特定非営利活動法人タ





写真3 威嚇する雄(中央) 雌(左)

ンチョウ保護研究グループ会誌第2号“T94(魔性の女)”P5)にと、飼育下での配偶行動の事例が報告されています。野生の状態では、こうした例は確認が難しくほとんど報告されていませんが、雌を巡る争いがある可能性は十分に考えられます。

雌を巡る争いの要因は、①強いものが生き残るという野生の本能が働くのか ②独り者の流れ雄が、自分の子孫を残すために雌を奪うのか ③単に雌の浮気心なのか等々が考えられます。濤沸湖の同じ場所で目撃した2回的事例

は、左記のいずれかの要因で起きた雌を巡る争いによる流血事件だと思われます。

私は、この最初の事件を契機にタンチョウの観察記録を取るようになり、6~7年になります。観察を始めた頃2~3組のつがいのタンチョウが濤沸湖周辺にいと聞いていましたが、私は2組のつがいの繁殖しか確認していません。

最近、繁殖している2組のつがい以外のタンチョウを多く見るようになってきました。繁殖期には2~7kmと言う広い縄張りを持ち、その中で交尾、営巣、育雛、採餌、休息とすべてを賄う住みやすい環境とは、見晴らしがよく開けたヨシ原があり、またハンノキの疎林もあって、近くに川があり、餌もある程度は不自由しないという条件だとすると濤沸湖でも、当てはまる場所は極めて少なくなるようで、つがい同士、つがいと親子連れ、つがいと単独個体など、縄張りをめぐる争いを多く目撃するようになりました。

タンチョウは一夫一妻型で、つがい関係は長年続くと言われ、その姿形と合わせて瑞鳥(※)とされていますが、時には、縄張りをめぐる争いや雌を巡る争いが死に至るような争いになってしまうことがあるようです。

※編集部注 瑞鳥(ずいちよう:めでたいことの起こる前兆とされる鳥。鳳凰など)

## シマアオジに関する想いや感想を募集!

編集部

前号(第184号)の「シマアオジ:その減少と保全策」(シンバ・チャン)について、皆さんはどう感じられましたでしょうか。シマアオジは十数年前なら道内各地で普通に見られ、また当会の植苗ウトナイや福移の探鳥会でも必ずと言っていいほど観察されていましたが、今や北海道、いや我が国では絶滅を危惧するまでとなっています。

本種がまた身近に見られることを願い、当会でも可能な限り保全に向けた取り組みができればと考えています。そこで、皆さんからシマアオジに関する想いや感想などを募集し、本誌で掲載したいと思えます。多数のご投稿をお待ちいたします。

### [募集要領]

内容:シマアオジに関する想いや感想、意見など  
タイトル:自由

字数:300~400字程度(写真・スケッチ歓迎)

写真には、撮影年月日と撮影場所を明記

募集締め切り:平成28年10月31日(月)まで

送付先:北海道野鳥愛護会編集部まで

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目

加森ビル5 六階

北海道自然保護協会気付

mailアドレス yatyoudayori@gmail.com

### 表紙の鳥

### ハチクマ

(カラー写真は<http://www.aigokai.org>に掲載)

変わった習性のタカ、ハチクマです。長距離の渡り、雌と雄、幼鳥の羽衣のバリエーション、そしてハチの巣を襲う習性など、この鳥への興味は尽きません。繁殖地で偶然、雄がハチの巣を運ぶ姿を撮影できました。

北山 政人(札幌市西区)



# 野鳥



情報コーナー

## 天売島にオオチドリ、ヤマヒバリ、 オウチュウが飛来

苫前郡羽幌町天売島 齊藤 暢

4月17日の天売島は朝から雪混じりの雨が降っていたのですが、叔父の営む旅館の裏は芝地になっていて、この日も沢山のツグミやカシラダカ、ミヤマホオジロがエサをついばんでいました。何か混ざっていないかと双眼鏡で探すと、見たことのないシギチドリ類の仲間がいたのですが、すぐには名前も出てこなくて、鳥友に電話し図鑑を持ってきてもらいました。それが「オオチドリ」だと分かったのですが、珍しいかどうかはこの時はよく分かりませんでした。1999年に余市で観察された記録に次いで北海道では2例目ではないかと教えて頂きとても驚きました。翌18日も同じ場所にて、警戒心はあまりなく止めてある車に鳥の方から近づいて来て私との距離は2m、その10m先にはヤツガシラの姿もあり、雪降る中オオチドリとヤツガシラのコラボレーションは何か不思議な感じがしました。19日は朝から快晴、旅館の裏にはもういませんでした。元気に目的地に渡れたでしょうか。



オオチドリ 2016. 4. 18 天売島

4月23日、前日から天売島に鳥見に来ていたNさんから電話があり「ハマヒバリだったかな？ヤマヒバリだったかな？たしかそんな名前だったと思うのですが・・・来れますか？」どちらの鳥にしたって珍鳥、アドレナリン全開でNさんのいるポイントへ移動。「5羽位のミヤマホオジロの群れに混ざっています」と言うので探してみると砂利道の脇に数羽のミヤマホオジロの中に1羽のヤマヒバリがいました。以外と地味な鳥でしっかり観察していないとミヤマホオジロやカシラダカだと思って見落としてしまいそうです。もしかしたらこれまでも見落としていたかもしれませんね。ヤマヒバリの北海道での観察記録については分かりませんが、天売島では初記録となりました。本当に偶然の出会いでしたがこれこそがバードウォッチングの醍醐味。天売島は5月中旬まで沢山の渡り鳥で賑わう季節なので



ヤマヒバリ 2016. 4. 23 天売島

ですが、5月末になるとノゴマやアオジ、コムクドリといった夏鳥が目立つようになります。私は天売島で父が経営する運送会社で仕事をしているのですが、配送作業をしていると鳥仲間のAさんが私の所に来て「黒崎にオウチュウいるぞ、まだいると思うよ」と教えてくれました。12時を過ぎた頃ようやく作業も終わりトラックのまま現場へ向かいました。しかし、見つけることが出来ずどこかへ飛んでいったんだろうと諦めかけたその時、一緒に仕事をしていた私の弟が「あれじゃない？」と50mほどはなれた枝先に止まるオウチュウを見つけてくれました。とりあえず証拠写真も撮れたので一度帰宅し、今度は名古屋から鳥見に来ていたSさんを誘い車中から観察することに。雨が降ったり止んだりという天候の中、オウチュウはフライングキャッチを繰り返しながら開けた笹藪に所々ある枝先を移動していました。最初は50m以上離れた場所にいたのですがだんだん近くへ飛んできて、最後は5mほど目の前の枝に来てくれ2人とも大興奮の撮影会となりました。オウチュウはこの後2日ほど滞在しましたが、天売島では今回が初記録となりました。



オウチュウ 2016. 5. 31 天売島

今年の春の渡りは昨年に比べると全体的には種類も群れの数も少ない印象でしたが、オオチドリを始め天売島初記録の鳥が数種観察されました。2月～3月亜種クロケアシノスリ、4月11日チャキンチョウ、4月17日オオチドリ、4月23日ヤマヒバリ、5月31日オウチュウ。

秋の渡りシーズンが待ち遠しい天売島、宜しければ一緒に鳥見しませんか？

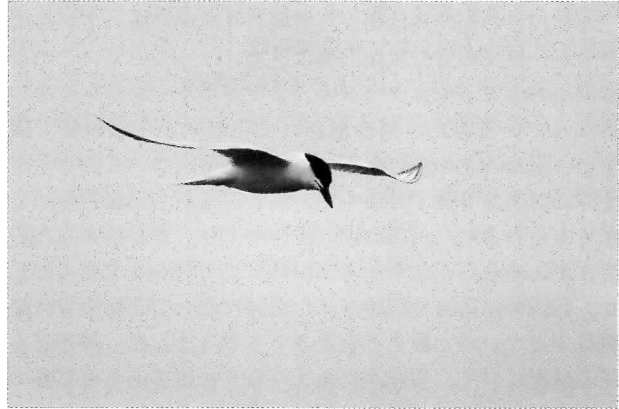
## 野付半島における ハシブトアジサシの観察記録

道東コクガンネットワーク 藤井 薫

野付半島の定期カウントを実施していた、2016年7月23日に思いがけず、ハシブトアジサシを観察しましたので報告いたします。野付半島での定期カウントは、起点となる春別川河口（道の駅「おだいとう」付近）から野付半島先端部までの約38kmを月1回のペースで全鳥種を対象にカウント調査を実施し、現在13年目を迎えています。

この日は、すでに繁殖地から戻り始めたシギチドリ類の数が増え始め、キアシシギを中心に500羽を超えていました。順調にカウント調査を進め、調査終点となる野付半島先端の砂丘を戻り始めた時、野付湾の内湾から干潟沿いに飛ぶ、中型のアジサシを見つけました。この時期に野付半島で比較的多く記録されるアジサシ類は、ハジロクロハラアジサシとアジサシの2種ですが、大きさや色合いからアジサシだろうと思っていました。運良くこちらに近づいて来たので、記録用に撮影しようとファインダーの視界に入ると、一目で特徴的な太く短いクチバシが目に入り、尾

の短さも確認できました。こちらに接近してこなければ、アジサシと思い込んでいたかもしれないので、運の良い出会いとなりました。その後は、すぐに干潟から野付半島の外海方向へ飛去して行きましたが、野付半島基部の茶志骨川河口でも少し遠くを飛ぶ、アジサシ類を数日前に見ているので、それもハシブトアジサシであった可能性があると思っています。やはり、日頃の丁寧な観察が必要であることを再認識させられました。



ハシブトアジサシ 2016. 7. 23 野付郡別海町野付半島

## シロハラクイナが 伊達市アルトリ岬に現れました

伊達市 福田 友子

2016年5月19日17時13分、伊達市南有珠町アルトリ岬に続く自宅裏庭に、見慣れない鳥がヒョッコリ現れました。キジバト大で白い顔と胸、黄緑色の嘴の根元はオシャレに赤い。黒っぽい頭と背中にエビ茶のお尻をピクピクさせて、細すぎる足で枯葉を蹴散らし何かを食べています。カメラを構える窓辺の気配に気が付き、18時04分歩いて裏山へ消えました。主に東南アジアからインドに分布していて、日本では琉球諸島で留鳥のシロハラクイナでした。

5月20日18時19分、同じ場所に再び現れました。野鳥用の小さな水場に両足を入れています。

5月21日16時、前庭の池の茂みにいました。17時18分突然飛び出し、走って裏庭に消えていきました。

5月22日10時、裏庭でヒヨドリがけたたましい。見るとシロハラクイナが悠々と歩いて裏山へ消えていきました。17時08分裏庭で採餌。ハシブトガラスが上空でカー！と威嚇したため、驚き走って山に消えました。ヒヨドリには強く、キジバトとは仲良し。カラスは怖い存在らしい。

5月23日朝6時、裏庭で採餌。16時45分前庭でクオックオックオットと鳴きながら採餌をしていました。

5月24日13時25分、車庫に車を入れ庭へ出ようとした所にシロハラクイナがいて、双方ビックリです。

5月25日13時41分、裏庭水場で水を飲み水浴び。ハコネウツギの枝に飛び上がり羽繕いをしています。

5月26日朝8時22分、裏庭で採餌中、カラスが1m離れた所に降りた為雪柳の下へ消えました。

5月27日朝9時42分、裏庭でミミズを食べています。市のゴミ回収車の音楽に驚き消えました。14時50分裏庭の水場で水浴びした模様、羽ばたきを繰り返し羽繕いし2分後山へ消えました。

その後は観察されませんでした。この9日間、毎日用心深く忍者のように歩いて現れ、水場の水を飲み、樹上で羽繕いや休憩をする姿が見られました。アルトリ岬は5月18日にショウドウツバメの本隊が到着し、19日にアオバトも鳴きました。君は誰と来たの？旅の無事を祈ります。



シロハラクイナ 2016. 5. 23 伊達市

## 北の地へ飛来したサンコウチョウ

日本野鳥の会 苫小牧支部 新谷 幸嗣

2016年5月17日、苫小牧市内にサンコウチョウが来ているらしいとの連絡。平日なので行けないのと、まさか苫小牧市内で?という気持ちがあり、さほど気にしていませんでした。しかしその後も問い合わせがあり、本当に来ているのだと確信に変わりました。

5月20日土曜日、ようやく時間が出来たので早朝からサンコウチョウ探しに市民文化公園へ向かいました。この公園は市役所に近く、さほど広くない公園ながらも渡りの中継地として様々な種が見られ、数年前から春の渡りデータを取ってきていました。ヤマシギやオオジシギ、ルリビタキやコマドリ。カヤクグリが見られた時もありました。そんな見慣れたマイフィールドの公園もサンコウチョウ狙いの人が集まり、いつもと違った様相を見せていました。

6時頃、公園内に聞いたことのない囀りが響いてきました。しかし、初めて聞いてもそれと分かる囀り。

『ツキ・ヒ・ホシ・ホイホイホイ』

周りの方々もざわめきだし、姿を探します。高い木の、葉が生い茂った辺りをひらりと横切る影。体の大きさはオオルリくらいでしょうか。頭がずいぶん大きく見えます。ヒタキ類のような動きを見せますが、長い尾羽が目立つ不思議なフォルム。青いアイリングと嘴。日が当たると赤茶色の背が鮮やかに見えます。近づく人に怒って冠羽を立て



サンコウチョウ 2016. 5. 20 苫小牧市

る姿も確認できました。

結局、この5月20日がサンコウチョウを確認できた最後の日となりました。北海道鳥類目録改訂4版(藤巻裕蔵2012)によると、過去に白老や釧路で確認されたこともあるようです。

風に流されて北の大地へ来てしまったのでしょうか?無事に本来の繁殖地へ戻れたことを願います。



### 鶴川河口

2016. 5. 22

【記録された鳥】ヒドリガモ、カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、キジバト、アオサギ、カッコウ、コチドリ、トウネン、ユリカモメ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、チュウヒ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ウグイス、マキノセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン 以上28種

【参加者】井山幸大、岩井 茂、上坂 久・千幸、小山内恵子、門村徳男、金子喜映・洋子、川東保憲、岸谷美恵子、栗林宏三、齊藤由美子・佑朱、漆崎 修、品川睦生、鈴木恵子、高橋貞夫、辻 幸治、辻 雅司・方子、徳田恵美、中田勝義、畑 正輔、早坂泰夫・みどり、原 美保、樋口孝城、福島 文、本間康裕、丸島道子、簗島祥子、本杉政司・朋子、山下 茂、山本和昭、吉田慶子、吉見孝夫・柴乃 以上38名

【担当幹事】門村徳男、本間康裕

### 西岡公園とはちがう生き物 野幌森林公園(早朝探鳥会)

2016. 5. 29

札幌市豊平区 今野 北斗 (小学6年)

ほくは、5~6年ぶりに野幌森林公園に行きました。5~6年前に行ったときはフクロウを見に行きました。ウロの中でねている姿を見ることが出来て感動したので、この場所はよく覚えています。その時期は寒かったのでキビタキやホオジロなどの鳥は見られなかったけれど、今回はキビタキなどがたくさんいたのでびっくりしました。

ほくが今回一番見たかったのはクマゲラです。1時間以上歩きましたがクマゲラは見られなくて残念でした。でも、その分、予想外の鳥を見ることが出来ました。それはハチクマです。ほくは、この公園にハチクマがいるとは思ってなかったので今回一番びっくりしました。案内の人も30年かよっているけれどハチクマを見たのは初めてと言ってました。さらにツツドリも見ることが出来たので、写真をとろうとしたら残念なことにSDカードがまんばいになりました。ほくが今回この活動に参加して良かったことは、ほくの見たことがなかった鳥など色々な鳥がいたことです。

それとほくのいつも行っている西岡公園とは、ちがう自



然にふれることが出来たことです。途中でアライグマのオリがあったり、見たことのない花がたくさん咲いていて、とてもキレイでした。

ぼくは今回を通して、西岡公園にはない動物や自然にふれることが出来たととても勉強になりました。今回クマゲラを見ることが出来なかったので、次はぜひリベンジしたいです。次のときも行きたいのですが野球でなかなか行けないと思います。みなさんも参加してみてください。最後に、今回一番の思い出は、今回この活動を行っていた方々や参加していた人たちとふれ合うことができたことです。ぼくがこの活動にまた行ける時があれば絶対行きます。

帰りにはアオダイショウが木の上で気持ちよさそうに昼寝をしていたので、朝4時30分に起きたぼくも帰ったら寝ようと思いました。

【記録された鳥】キジバト、アオバト、ツツドリ、ハチクマ、トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、キビタキ、オオルリ、カワラヒワ、シメ、イカル、ホオジロ、アオジ 以上28種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、伊藤 牧・俊子、今村三枝子、井山幸大、白田 正、岡 真由美、加藤茜湖、加藤伶、金子喜映・洋子、川東保憲、河村洋和・千恵、川村宣子、北山政人、小島俊幸、小谷内久江、今野純子・北斗、齋藤由美子・佑朱、漆崎 修、品川睦生、島田芳郎・陽子、霜村耕一、高橋きよ子、高橋貞夫、高橋利道、竹田芳範、立田節子、田中冬彦、田中 陽・雅子、田村恵美、辻雅司、辻田捷紀、戸津高保、中正憲信、畑 正輔、早坂泰夫、廣木朋子、升井純子、松原寛直・敏子、真鍋よし江、三井 茂、本杉政司・朋子、山下 茂、山室ゆかり、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子、吉本はるみ 以上57名

【担当幹事】島田芳郎 早坂泰夫

## 植 苗 ウ ト ナ イ

2016. 6. 5

札幌市白石区 本杉 政司・朋子

昨年の6月から参加させて頂きました。参加者の皆様に「この鳴き声はキビタキだよ」「あそこにいるよ」など声をかけて頂き、驚く事ばかりの1年でした。

当日の植苗ウトナイは天気が良く、気持ちの良い1日でした。以前は湿地が広がって野鳥の観察もしやすかったのですが、現在は乾燥が進み周りの木々も高くなったことで野鳥を探すのが難しくなっていました。

上空でオジロワシが飛んでいるのを確認できました。また、ハジロクロハラアジサシ飛んでいたようでしたが、そのとき直接観察することができなかつたため、あとで野鳥図鑑で確認しました。自分たちだけでは、ハジロクロハラアジサシが植苗ウトナイにいることすらわからなかつたと思います。探鳥会に参加していたからこそ知ることができました。

これからも色々な方たちに沢山のことを教えて頂き、野鳥との出会いを楽しみに参加させて頂きたいと思います。

ありがとうございました。

【記録された鳥】マガモ、キジバト、アオサギ、ツツドリ、カッコウ、ハリオアマツバメ、アマツバメ、ハジロクロハラアジサシ、トビ、オジロワシ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、エゾセンニユウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ノビタキ、キビタキ、スズメ、カワラヒワ、ベニマシコ、アオジ、オオジュリン

以上29種

【参加者】今村三枝子、上坂 久・千幸、白田 正、遠藤明美、金子喜映・洋子、川東保憲、北山政人、栗林宏三、齋藤由美子・佑朱、品川睦生、島崎康広、田中さちよ、辻雅司・方子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、中田勝義、橋爪陽子、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、廣木朋子、福島 文、本間康裕、丸島道子、宮津京子、本杉政司・朋子、森本玲子、山口英芳・浩実、吉田慶子、吉見孝夫・柴乃・昌彦 以上40名

【担当幹事】畑 正輔 早坂泰夫

## 厚 別 川

2016. 6. 12

札幌市厚別区 金子 喜映

風は強かったが快晴、初夏を告げるカッコウが「ようこそ」と言うように良く響く声で私たちを迎えてくれた。

昨年6月妻とメンバーに入れて頂き、一年が過ぎた。厚別川は初めてのコース、見晴らしも良く気分爽快。前日には担当スタッフの方が下見をして下さり、とてもスムーズに進む事が出来た。スタッフの皆さんに毎回感謝している。

厚別川は我が家からも近く、何度か釣りをしたことがある。ヤマベ、ウグイが釣れ、秋にはサクラマスの上廻する姿も見られた。この一年で探鳥会に参加したのは今日で18回、双眼鏡の使い方にも不慣れで、皆さんがそこそこと教えて下さるが中々視野に入れる事が出来ず、毎回悔しい思いをしている。今回もスタートして間もなく何方かが、アリスイ発見とその方向を指差してくれたが探せなかつた。アリスイは昨年4月宮島沼の時にも記録されている。5月29日の第2回デジタル・バードウォッチングで（ふれあい交流館）、今堀氏がテーマ「北海道のキツツキ類について」の中で、丁寧な解説と映像で紹介してくれた。長い舌先（10cm）で蟻を好んで捕食することからこの名がついたそうだ。どうしてキツツキの仲間に入るのか解説を聞き逃したようだ。

デジタル・バードウォッチングは毎回参加しているが、この企画私には有り難い。スタッフの方々の体験談や映像を落ち着いて聞いたり見たり出来る。他に私だけの理由だが、高齢のせいフィールドワークが辛い時もあるからだ。スタッフの皆さんのご努力には何時も感謝している。

厚労省はお年寄りを分類して「後期高齢者」と言うが、「高貴高齢者」と表記して欲しい。戦後の日本を支えたのは今のこの世代の人たちも含んでいる。政府は「新しい判断」で90歳以上を「末期高齢者」とし、年金支給停止と言いつくすかも、長寿を「国賊」とは何とも悲しい、「正しい判断」をお願いしたい。



コースの終わり近くでコヨシキリがススキの先端にとまりきれいな声で鳴いていた。2～3m先の距離で飛び去る様子もなく、実に愛くるしいその姿に見とれてしまった。折からの強風にススキは遊動円木のように大きく揺れていたが、それをものともせず楽しんでいるようだった。福島出身の詩人草野心平に「富士山」がある、その一節を紹介させて頂く。

「<sup>かわづら</sup>河面に春の光はまぶしく溢れ そよ風が吹けば光<sup>よしきり</sup>  
たちの鬼ごっこ 葦の葉のさきやき 行行子は鳴く  
行行子の舌にも春のひかり……」。

この詩に登場するのは、オオヨシキリではないかと勝手に想像している。姿も囀りもコヨシキリに比べて大きくて、詩人の心平に強い印象を与えたように思われる。今も気になるのは福島原発事故のこと、半径30kmの避難地域に生息している野鳥たちのこと、被害を受けたのは人間だけでは無い。スタッフの方から教えて頂いたことだが、野幌森林公園コースでは、その姿は確認できないが毎回のようによブサメの囀りを聞いている。しかもかなり高い声で。「この鳴き声が聞き取れれば聴覚はまだ大丈夫だよ」と。推定だが6～7kHz（キロヘルツ）位の高さと思われる。

人は、一度インプットされたものはその名を聞いただけで、それが何かイメージできるもの、心配はしていない。

スタッフの方が推薦された書「鳥ってすごい！」（樋口広芳著・ヤマケイ新書）、驚嘆しながら読んでいる。膨大な資料の分析と観察、気が遠くなりそうだ。書き出しのところで、反対運動が起こったあのオスプレイについて、「人間がつくりだしたオスプレイは墜落することがあるが、英語名オスプレイのミサゴは、決して墜落しない」と書いてある。このキッパリとした語り口は痛快である。副題を付けるとしたら「この本ってすごい！」先を読むのが楽しみだ、是非ご一読を。次回のコースは福移（6/26）、コヨシキリ、ノゴマ、ノビタキたちとの再会を楽しみにしている。

【記録された鳥】キジバト、アオサギ、カッコウ、イソシギ、オオセグロカモメ、トビ、アリスイ、アカゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオアカ、アオジ、カワラバト（ドバト） 以上27種

【参加者】秋山洋子、井上公雄、江蔵俊一、大表順子、金子喜映、川東保憲・知子、川村宣子、栗林宏三、後藤義民、小谷内久江、齊藤由美子・佑朱、品川陸生、島崎康広、杉田範男、鈴木勝之、高橋貞夫、田辺 至、辻 雅司、戸津高保、中正憲信・弘子、成田京子、橋爪陽子、畑正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城・陽子、菱谷紀久子、廣木朋子、本間康裕、松原寛直・敏子、宮津京子、本杉政司・朋子、横山加奈子、吉見孝夫・柴乃 以上41名

【担当幹事】品川陸生、原 美保

## 野幌森林公園

2016. 6. 19

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、カイツブリ、キジバト、アオバト、アオサギ、ツツドリ、カッコウ、トビ、コゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エナガ、オオムシクイ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、カワラヒワ、アオジ

以上31種

【参加者】青木武男・あけみ、井上公雄、今堀魁人、今村三枝子、岩井 茂、鹿川美咲、川村宣子、栗林宏三、河野美智子、後藤義民、三歩幸光、品川陸生、杉田範男、高田征男、高橋利道、辻 雅司、道場 優、戸津高保、中村隆、橋爪陽子、畑 正輔、早坂泰夫、廣木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、山本昌子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子、吉本はるみ 以上34名

【担当幹事】栗林宏三、道場 優

## 福 移

2016. 6. 26

札幌市北区 辻 雅司

新米幹事として福移の探鳥会を任されて3年になります。担当幹事として感想を書きたいと思います。福移は明治初頭に筑前福岡藩黒田家土族が入植したことから、“福移”と呼ばれています。この地での探鳥会は1975年から開始されており、当会にとっては由緒正しき探鳥地の一つです。残されている観察記録によれば1986年から天候不順などによる中止もなく30年間にわたって続いています。朝からの雨で探鳥会中止が懸念され、「ア～ア、私のところで記録が途切れてしまう！」不安がよぎりました。しかし開始時刻には時折の小雨となり、無事開始することができました。参加者は雨のためか例年と比べて少人数で、ベテラン会員さんが主体でした。

このフィールドは、札幌市内を流れる豊平川が石狩川に合流する辺りから下流側の石狩川左岸の堤防河川敷で、堤防の両側には河川敷と牧草畑が広がり、河畔林が散在する牧歌的な環境で、草原性の鳥を観察するには恰好のポイントです。この堤防からは、広大な石狩平野に流れる石狩川や手稲の山並みが一望できる北海道らしい風景です。この風景30年間大きく変わらぬものと思いがちですが、過去の観察記録からは消えた鳥（シマアオジなど）、新たに加わった鳥（ウグイス）などがあり、取り巻く環境に変化があるようです（詳しくは、北海道野鳥だより182号 樋口孝城著「福移探鳥会におけるウグイスの記録の不思議」）。

この探鳥会の楽しみの一つは、高い確率でシマセンニュウの観察やさえずりを聞けることです。この雨でどうかな～と不安でしたが、参加者のお一人から、開始前の下調べでシマセンニュウ、マキノセンニュウのさえずりを聞いたとのことで、期待が膨らみました。堤防へ上がる前の小

道や堤防の左右の河川敷や耕地で、風でゆれる草の上のノビタキ、オオジュリン、ホオアカ、コヨシキリなどの姿を楽しみました。シマセンニュウのさえずりは数カ所で確認できましたが、残念ながら姿は観察できませんでした。その後の幹事会では、参加者から「シマセンニュウはどのように鳴くのですか?」との質問があったと報告がありました。ベテラン会員さん主体であることから、開始前に予習としてシマセンニュウの声を聞いてもらう手間を省いてしまったことに大いに反省です。時折の小雨、風もありの天気でしたが、鳥合わせではあれやこれやで合計34種を記録。ここ6年間では最多の記録でした。

【記録された鳥】 マガモ、カルガモ、キジバト、アオサギ、カッコウ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、チュウビ、アリスイ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、マキノセンニュウ、シマセンニュウ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、ノゴマ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン

以上34種

【参加者】 五十嵐優幸、臼井明夫、白田 正、金子喜映・洋子、栗林宏三、小谷内久江、品川睦生、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、竹田芳範、辻 雅司、中正憲佑、畑 正輔、早坂泰夫、美頭佳範、樋口孝城、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、山本康裕、横山加奈子

以上24名

【担当幹事】 栗林宏三、辻 雅司



【宮島沼】

2016年10月2日(日)

宮島沼は、ユーラシア大陸の北東地域で繁殖を終えて夏を過ごしたマガンの渡りの中継地として重要な場所です。例年9月下旬から渡来が始まり、この時期にピークを迎えます。マガンのほかにも、

ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類なども見られます。時には猛禽類が上空を飛び、水面の鳥たちが一斉にざわめくのも見ものの一つです。午前11時半頃に鳥合わせを行い、自由解散となります。天気の良いれば駐車場横で昼食をとることもできます。

集 合：湖畔 10:00

交 通：中央バス 岩見沢ターミナル発 (月形行)  
または月形駅発 (岩見沢行)  
「大富農協前」下車 徒歩10分

【野幌森林公園】

2016年10月9日(日)、11月6日(日)、12月4日(日)

初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しみます。夏鳥はほとんど去り、カラ類やキツキ類などの留鳥が主体となりますが、12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。大沢園地で昼食、午後1時頃には大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00

交 通：夕鉄バス 新札幌駅発 (文京台南町行)  
「大沢公園入口」下車 徒歩5分  
JRバス 新札幌駅発 (文京台循環線)  
「文京台南町」下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】 2016年11月13日(日)

晩秋のウトナイ湖にはこれから南に向かったり、近郊で越冬したりするハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、

カワアイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやヒシクイも見られます。湖岸をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃にネイチャーセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、同じ場所で昼食をとることになります。

集 合：野生鳥獣保護センター前 9:30

交 通：道南バス 新千歳空港発 (苫小牧行)  
「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

- ☆ いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。
- ☆ 昼食、観察用具、筆記具などをご持参ください。
- ☆ 探鳥会の問い合わせ先  
北海道自然保護協会 ☎011-251-5465  
10:00~16:00 (土日、祝日を除く。)

鳥民だより

◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前入りカレンダーを販売します (1部1,200円)。お渡しは11月ウトナイ湖探鳥会と12月野幌森林公園探鳥会となりますので、申込時に受け取り場所をお知らせください。

申し込み先 品川 011-571-6915

小堀 011-591-2836

【新しく会員になられた方々】

- 池端 耕治 (江別市)
- 吉本はるみ (札幌市中央区)
- 新藤 千里 (札幌市西区)
- 齋藤 暢 (苫前郡羽幌町)
- 田中 史雄 (夕張郡長沼町)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>